

新版日本文学史中古

久松潜一
五味智英
池田亀鑑
秋山虔
市古貞次
麻生磯次
吉田精一

至文堂刊

新版日本文学史 5 近世Ⅱ

昭和48年6月5日 発行 ひさ まつ せん いち
久 松 潜 一 編 発行所 至 文 堂
東京都新宿区払方町27 東京 (260) 2211(代) 発行者 佐 藤 泰 三

印刷 株式会社文栄社 製本 大口製本印刷

序

文学史の研究は、文学研究における到達点であり、これによって全体と有機的に統一づけることができる。日本文学の研究においても、明治以後はそれ以前の注釈を中心としたと異なつて、文学史研究が中心的位置を占めてきたが、なお今後になつところが多い。私自らも日本文学史の研究を一つの課題として多年考察を続けており、これに関する一、二の述作をまとめたことがあるが、個人の研究には限界がある。ことに規模の大きい文学史においては、それぞれの時代の専門分野にわかれてくるので、共同的に扱うことが必要となるのである。

こういう考えのもとに同学とともに先年規模の大きい日本文学史を企画し、各時代文学史をそれぞれ専門とされている方々にこうて執筆していただいた。全体を一つの史観によって貫くというよりも、それぞれの分野における最も正確な叙述によって文学史の基礎をしっかりと立てることが目標であつた。そして、多数の人が書いた場合に、相互に有機的な連絡がなく統一のなくなることをないために、私のほかに五味智英・池田亀鑑・市古貞次・麻生磯次・吉田精一の五氏がそれぞれ専門とする時代を分担されて、執筆者とも十分打ち合わせをし、各項が講座風な配列と叙述に終らないように有機的な調整をした。そして、執筆者の深い協力と編集の五氏の献身的な努力とによって、立派な内容の上に全体に統一のとれた文学史となることができたのである。

それから一〇年が過ぎた時、顧みると文学史上の新資料・新見解の現れた点も多く、学界の水準を示すためには増補訂正をなすべき点も生じてきたので、執筆された方々に再びこうて増補訂正を行い、新しく発表された参考文献をも加えた。近代編ではその後の文学的事象を書き加えていただき、年表も数年間の記事を補った。したがって索引を

新たに作成し、口絵写真なども新しくした。ただこの間に、執筆者のうちで池田亀鑑・風巻景次郎・西下経一・秋本吉郎・田辺幸雄・吉原敏雄・佐佐木治綱・杉浦正一郎・宇佐美喜三八・片岡良一氏らが世を去られた。そのために中古編の編集に秋山虔氏を委嘱するとともに、各項目についてもそれぞれ新しく執筆者を依頼して増補訂正を行った。かくして面目を一新した日本文学史六巻が完成したのは昭和三十九年のころであった。

それからさらに、五、六年は過ぎたが、増補訂正版では、増補した部が本文とは別々になっているので、使用の上でも体裁の上でも不便なことが少なくなかった。そこでこのたびは執筆者にこうて増補の部分をも本文に組み入れ、また全面的に書きかえたりして、新版として世に送ることになった。近世・近代はもとと量も多かった上に、近代では書き加える部分も多く、一層量も大きくなったので二冊にわけることにした。また総説年表編の年表も書き加えられ、量も多くなるので、年表編と総説編を別々にすることにした。

このたびの新版では、参考文献をまとめて後に加えることにした。その他、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。ただ引用文はもとのままである。

日本文学史の研究は、今後も進展してやまない。本書にしても、文学史の一つの段階を表すものではあるが、これによって日本文学史研究の現在における大きな礎石としての役割を果たすことはできるであろう。

終りに、この日本文学史のためにそれぞれすぐれた研究成果にもとづいて執筆され、再三にわたって増補もしくは書き改めて下さった方々の協力を心から感謝する。ただ増補訂正版からこのたびの新訂版に至る間に窪田敏夫・田崎治泰氏らが世を去られたためもあって新しく執筆を中西進・犬養廉・島田良二・福田秀一・長谷川強・恩田逸夫・片岡懋氏らに委嘱した。片桐顯智氏は書き改めを完成されたのちに世を去られた。この日本文学史の形成と発展にも、種々の世の移り変りが現れていることを今更に感ずるのである。

さらにまた、この文学史をよりよくするために不断に協力を惜しまれなかった佐藤正叟氏も世を去られて、新たに佐藤泰三氏によってことが進められたことを付記して、感謝の意を表したい。

昭和四十六年四月

久松 潜 一

目次

概説

一

時期区分について (一) — 平安時代の歴史的情勢 (二) — 平安京とその周辺 (三) — 中古文学の制作者と享受者 (四) — 後宮・斎院・斎宮の女性 (五) — 中古文学の背景としての年中行事 (六) — 思想的背景としての仏教 (七) — 思想的背景としての陰陽信仰 (八) — 外国文学の影響と国文学の成立 (九)

増 補 平安文学像追求の歴史

一九

平安文学像の結成 — 明治期の研究 (一〇) — 大正期の視座について (一一) — 昭和期の平安文学像 (一二)

前期

漢文

二〇

第一章 漢文

二一

一 漢文学の成立と展開

二二

本章で取り扱う範囲 (三) — 前期漢文学の概観 (四)

二 成立期の漢文学

二三

弘仁期の漢詩集 (五) — 弘仁期の詩人 (六)

三 展開期の漢文学

二四

寛平延喜期の漢詩文 (七) — 天曆期の漢詩文 (八)

四 国史その他の散文…………… 五

続日本紀・延喜式など(五) — その他の散文(六)

第二章 説話…………… 六

一 日本靈異記…………… 六

靈異記の述作動機(六) — 靈異記の諸本(六) — 靈異記の組織・内容(六)

— 靈異記の著者及び成立年代(六) — 靈異記説話の内容と性質(六) — 靈異記の価値(六)

増補訂正…………… 七

靈異記の諸本(七) — 靈異記説話の性格(七) — 靈異記の組織(七) — その

他(七)

二三 宝 絵…………… 七

三宝絵の述作動機(七) — 著者源為憲とその才学(七) — 三宝絵の諸本(七)

— 三宝絵の組織と内容(七) — 三宝絵の影響(八)

第三章 和歌と歌謡…………… 八

一 勅 撰 集(古今集)…………… 八

総叙(八) — 古今集以前(八) — 唐風と国風(八) — 古今集の成立(八) —

両序の成立(八) — 古今集の伝本(八) — 古今集の注釈書(八) — 古今集の

内容(八) — 古今調(九) — 古今集の用語(九) — 古今集の表現技術(九)

— 古今集の風情(九) — 古今集の抒情(九) — 心と詞(九) — 万葉と古今

増補訂正…………… 一〇

古今集の成立(二〇) — 古今集両序(二二) — 古今集伝本(二三) — 古今集の構造(二三) — 古今集の研究史(二四) — 古今集の解釈と文法(二四) — 古今集の文体・修辭(二五) — 文学史からみた古今集(二七) — 古今集の作家論(三〇)

二 私撰集……………一三

総叙(二三) — 古撰万葉集(二三) — 新撰万葉集(二三) — 新撰万葉集の増補(三七) — 秋萩集(三〇) — 続万葉集と継色紙集(三三) — 新撰和歌集(三三) — 結語(三三) — 古今和歌六帖(三四) — 中期以後の私撰集(三三)

三 歌合……………一四

歌合の起源(四〇) — 歌合の成立(四二) — 歌合の史的展開(四四) — 第一期(四四) — 第二期(四六) — 第三期(四九) — 歌合年表(四五)

四 歌謡……………一五

歌謡の性格(四五) — 神楽歌概説(四四) — 催馬楽の概説(四五) — 風俗歌概説(六二) — 東遊の概説(六五)

増補訂正……………一七

神楽歌の伝本(六六) — 神楽歌の伝来(六七) — 里神楽の伝承(六七) — 催馬楽の成立(六八) — 催馬楽の動態(六八) — 催馬楽の伝来(六八) — 催馬楽の音楽的復元(六九) — 文治本風俗古譜の伝来と復元(二九) — 風俗歌の伝来(七〇) — 東遊歌の伝来(七〇)

第四章 物語……………一七

一 竹取物語……………一七

竹取物語という名称(二七) — 竹取物語の梗概(二七) — 竹取物語の素材(二七)

—竹取翁譚の流布(二七) —竹取物語の主題構想(二七) —竹取物語の成立
(二七) —竹取物語の作者(二八) —竹取物語の伝本(二八) —竹取物語の価値
(二八)

二 伊勢物語

伊勢物語という名称(二八) —伊勢物語の梗概(二九) —伊勢物語の素材(二九)
—伊勢物語の主題構想(二九) —伊勢物語の成立(二九) —伊勢物語の作者
(二九) —伊勢物語の伝本(二九) —伊勢物語の価値(二九)

三 大和物語

大和物語の書名とその由来(二九) —作者と成立年代(二九) —大和物語の素
材と成立過程(二九) —大和物語の形態と諸本(二九) —大和物語の構成上の
特色(二九)

四 平中物語と平中滑稽譚

平中物語の名称(二九) —平中物語の成立(二九) —平中物語の構成(二九) —
平中物語の系譜(二九) —平中物語の描く貞文の人間像(二九) —平中滑稽譚
の発生と系譜(二九)

五 宇津保物語

宇津保物語という名称(三〇) —宇津保物語の形態とその性格(三〇) —宇津
保物語の主題(三〇) —宇津保物語の構成と方法(三〇) —宇津保物語のあらす
じ(三〇) —宇津保物語の作者(三〇) —宇津保物語の著作年代(三〇) —宇
津保物語の諸本(三〇) —重複・錯簡その他の問題(三〇) —宇津保物語の文
体・情緒など(三〇) —宇津保物語の文学史的価値と今後の研究課題(三〇)

六 落窪物語付、住吉物語その他……………	二四二
----------------------	-----

落窪物語の成立と伝来 (二四二) — 落窪物語の主題と構成 (二四七) — 落窪物語の特色 (二五三) — 落窪物語作者の意図 (二五五) — 付、住吉物語その他 (二五九)

第五章 日記……………	二六一
-------------	-----

一 土佐日記……………	二六一
-------------	-----

土佐日記の作者と成立 (二六二) — 土佐日記の三つの主題 (二六六) — 土佐日記の構想と手法 (二七三) — 土佐日記の表現と文体 (二七六) — 土佐日記の意識と効果 (二七八)

二 蜻蛉日記……………	二八〇
-------------	-----

蜻蛉日記の書名 (二八〇) — 蜻蛉日記の作者 (二八二) — 蜻蛉日記の梗概 (二八五) — 蜻蛉日記の成立 (二九一) — 蜻蛉日記の文学史上の位置 (二九四)

中期……………	二九七
---------	-----

第一章 漢文学……………	二九九
--------------	-----

一 漢文学の継承と集成……………	二九九
------------------	-----

中・後期漢文学の概観 (二九九)

二 継承期の漢文学……………	三〇三
----------------	-----

本朝文粹その他 (三〇三) — 中期の作家 (三〇五)

三 集成期の漢文学……………	三〇七
----------------	-----

漢詩集その他 (三〇七) — 後期の作家 (三〇九)

四 結 語

三一

中国文学の影響と享受 (三一) — 平安朝漢文学の特質 (三五)

第二章 和 歌

三七

一 勅 撰

集 (後撰集・拾遺集)

三七

後撰集の成立 (三七) — 古今から後撰まで (三七) — 後撰集の内容 (三九) —

歌集の物語化 (三〇) — 後撰集の特色 (三二) — 拾遺抄と拾遺集 (三四) — 後

撰集から拾遺集へ (三六) — 拾遺集の特色 (三〇) — 拾遺抄の特色 (三三)

増 補 訂 正

三三

後撰集の伝本 (三三) — 後撰集の本質 (三三) — 拾遺集の伝本 (三五) — 拾遺

抄から拾遺集へ (三六)

二 私 家 集

三六

私家集概説 (三六) — 源順集 (四〇) — 斎宮女御集 (四三) — 曾丹集 (四四) —

実方朝臣集 (四五) — 重之集 (四七) — 安法法師集 (四八) — 和泉式部集 (五〇)

— 赤染衛門集 (五一)

増 補 訂 正

三五

大斎院前御集・大斎院御集 (五三)

第三章 物 語

三五

語 (源氏物語)

紫式部の伝記と物語の執筆 (五五) — 源氏物語第一部の構想と成立過程 (五八)

— 第一部前半の構想と梗概 (五九) — 第一部の短編的諸卷 (六二) — 第一部後

半の構想と梗概 (六三) — 第二部前半の構想と梗概 (六六) — 第二部後半の構

想と梗概(三七) — 第三部の構想と梗概・成立の疑問(三六) — 物語の結末と作者の技巧(三七) — 源氏物語の文学史的価値(三七) — 源氏物語の描写表現(三七) — 源氏物語の素材・モデル準拠 源泉(三七) — 源氏物語の流布と影響(三七) — 源氏物語の研究史(三七)

増補訂正

第四章 日記・紀行

一 紫式部日記

現存本の内容(元二) — 日記の原型(元二) — いわゆる消息文(元四) — 成立の時期(元六) — 成立の事情(元六) — 諸本(元六) — 文章(元九) — 価値(元九)

二 更級日記

菅原孝標の女(四〇〇) — 更級日記の梗概(四〇〇) — 更級日記の主題・特質(四〇一) — 更級日記の本文(四〇一)

三 和泉式部日記・多武峰少将物語(高光日記)・簗日記その他

1 和泉式部日記(和泉式部物語)

和泉式部日記の内容と式部の人間像(四二〇) — 和泉式部日記の作者と疑問(四二一) — 寛元本・俊成作者説の波紋(四二五) — 三系統論(四二七) — 和泉式部日記錯誤の処理(四二八) — 和泉式部日記と家集との関係(四二八) — 成立時期の問題(四二九) — 日記解釈の新方向(四三〇)

2 多武峰少将物語(高光日記)

高光日記と多武峰少将物語との呼び名(四三三) — 伝定家筆本と現存諸本及び注釈(四三三) — 多武峰少将物語の内容と特質(四三三) — 多武峰少将物語の作者

と成立(四三) — 高光集と日記・物語との関係(四四) — 物語の組織の改編(四七) — 多武峰少将物語補説(四八)

3 簞 日 記(簞物語).....四九元

簞日記の書名(四元) — 簞日記の梗概と構成(四三) — 簞日記の内容上の特色と評価(四三) — 簞日記の作者(四三) — 簞日記の題材(四五) — 簞日記の成立時期(四六) — 結語(四八) — 簞日記補説(四九)

第五章 随 筆(枕草子).....四四四

枕草子の内容(四四) — 書名について(四四七) — 成立とその年代 — 類纂か雑纂か — (四五〇) — 伝本とその研究史(四六〇) — 清少納言伝(四六六)

後 期四七〇

第一章 和歌と歌謡.....四七三

一 勅 撰 集(後拾遺集・金葉集・詞花集).....四七三

拾遺集から後拾遺集へ(四七三) — 後拾遺集の成立(四七三) — 後拾遺集の書名と組織(四七五) — 後拾遺集の歌人(四七五) — 後拾遺集の歌風(四七七) — 後拾遺集の注釈書(四七七) — 後拾遺集から金葉集へ(四七九) — 金葉集の成立(四八〇) — 金葉集の諸本(四八二) — 金葉集の書名と組織(四八三) — 金葉集非難の書(四八四) — 金葉集の歌人(四八四) — 金葉集の歌風(四八五) — 金葉集の注釈書(四八六) — 金葉集から詞花集へ(四八八) — 詞花集の成立(四八九) — 詞花集の書名と組織(四八九) — 詞花集非難の書(四九一) — 詞花集の歌人(四九二) — 詞花集の歌風(四九三) — 詞花集の注釈書(四九四)

二 私 家 集(後拾遺・金葉・詞花集時代).....四九四

1 後拾遺集時代の歌人と私家集.....四九四

2	金葉集・詞花集時代の歌人と私家集……………	五五
	伊勢大輔集(四九) — 能因法師集(五五) — 六人党周辺の集(四九六) — 定頼と頼宗の集(四九) — 相摸集など(四九六) — 四条宮下野集など(五〇〇) — 大納言経信卿集(五三) — 津守国基集(五四) — 讃岐入道集(五五)	

	江帥集(五五) — 周防内侍集(五六) — 祐子内親王家紀伊集(五七) — 權中納言俊忠卿集(五七) — 六条修理大夫集(五八) — 散木奇歌集(五九) — 行尊大僧正集(五九) — 藤原為忠朝臣集(五二) — 藤原基俊集(五三) — 中納言雅兼集など(五三) — 右京大夫顯輔集(五三)	
--	--	--

3	歌 合……………	五四
---	----------	----

4	歌 謡……………	五〇
---	----------	----

1	朗詠と倭漢朗詠集……………	五〇
	朗詠の成立と倭漢朗詠集(五三) — 漢詩文の朗詠とその譜本(五三)	
2	和 讃……………	五元
	讃嘆から和讃へ(五元) — 極楽六時讃その他(五二) — 和讃の受容と法文の歌の成立(五三)	

3	梁塵秘抄……………	五四五
	今様歌謡と梁塵秘抄(五四五) — 梁塵秘抄の今様歌謡(五四六) — 今様歌謡の特質(五四二) — 今様の場(五四五)	

一 狹衣物語……………五八

物語の書名と諸本（五九）——狹衣物語の梗概（五九）——狹衣物語の構成と諸作品との交渉（五九）——狹衣物語の世界（五九）——狹衣物語の影響（五六）——作者及び成立時期（五七）——狹衣物語の注釈書（五七）

二 浜松中納言物語・夜はの寢覚……………五九

1 浜松中納言物語……………五九

浜松中納言物語の作者（五九）——浜松中納言物語の梗概（五九）——浜松中納言物語の特質（五九）——浜松中納言物語の成立年時（五九）——浜松中納言物語末巻の問題（五七）——浜松中納言物語の名称と由来（五九）——浜松中納言物語の諸本（五九）——浜松中納言物語の注釈書など（五九）

2 夜はの寢覚……………五九

その伝来と研究史（五九）——伝本と題名（五九）——梗概（五九）——作者と成立（五九）——中村本夜寢覚物語について（六〇）——夜はの寢覚の特質と構成（六〇）

三 堤中納言物語……………六〇

作者と成立年代（六〇）——堤中納言物語の書名（六〇）——堤中納言物語の構想と主題（六〇）——堤中納言物語の特質（六〇）

四 とりかへばや……………六〇

伝本（六〇）——古本と今本（六〇）——現存本の梗概（六〇）——成立時期と作者（六〇）——内容（六〇）——改作の方法（六〇）——社会的地盤との関連（六〇）——後代文学への影響（六〇）

五 散佚物語……………六〇

散佚物語についての資料 (六三) — 散佚物語の概観 (六四四)

第三章 歴史物語 六九

歴史物語概説 (六九)

一 栄花物語 六三

栄花物語の書名 (六五) — 栄花物語の成立 — 正統説 (六三) — 栄花物語の作者 (六五) — 栄花物語の作製年代 (六五) — 栄花物語の内容 (六六) — 栄花物語の諸本 (六四)

二 大鏡 六六

大鏡の題名 (六七) — 大鏡の成立・作製年代 (六七) — 大鏡の成立・作者 (六九) — 大鏡の内容 (六七) — 大鏡の歴史観 (六七) — 大鏡の批判性 (六七) — 大鏡の諸本 (六五)

第四章 説話文学 六七

説話文学の共通性 (六八)

一 地藏菩薩靈驗記 六七

作者と成立 (六七) — 編成と内容 (六八)

二 今昔物語集 六九

名称と組織 (六九) — 今昔物語集の内容 (六九) — 今昔物語集の文章 (六九) — 作者の思想 (六七) — 作者と成立年代 (六九) — 今昔物語集の文学史的地位 (七〇) — 今昔物語集の諸本 (七〇)

三 打聞集 七〇